慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 楊絳の散文 四篇 |
| Sub Title | Four essays by Yang Jiang |
| Author | 櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2022 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.15 (2022. ) ,p.49- 71 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 翻訳 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20220331-0049 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

翻訳

# 楊絳の散文 四篇

櫻庭ゆみ子 訳

## はじめに

楊絳（一九一一―二〇一六）が『幹校六記』[1]を著したのは一九八〇年、六十九歳の時である。それから最晩年に至る三十数年の間に長編小説のほか、回想録、エッセイを矢継ぎ早に発表していった。彼女は、日常の些事に目を向ける。そして、脈絡なく様々な事象がひしめき合う現実の中から関係の網の目をとらえて物語を掬いあげ、絶妙な会話を交ぜつつ、読み手の前に対象を生き生きと浮かび上がらせる。楊絳は世態人情の機微を描きとる散文の名手と言える。その筆致の特徴は、歴史的文脈で語られ得ることを細部の事実を拾いあげながら、個の体験に近づけて再現させる題材の日常性の提示にある。描写された出来事を遠い過去のそれではなく、すぐそこで起こるより身近な出来事に感じさせるのである。今日文学が力を持ち得るとすれば、一つにはこのような卑近な題材の具象化に

よる真実味の提示にあるように思うが、どうだろうか。

楊絳の作品は、故中島みどり氏による丁寧な翻訳と詳細な注釈によって多く日本語に紹介されている[2]が、未邦訳のものも多数ある。前号（14号）に続き本号では、楊絳が一九八〇年代後半から一九九〇年代にかけて発表した散文の中から、既刊の邦訳散文集に未収録の作品をいくつか翻訳して紹介しようと思う。

## 初めてのメーデー　――昔の思いであれこれ[3]

一九五五年四月末、私は緑色の一枚の参礼券をもらった。五月一日のメーデーに天安門広場に参列できる札（ふだ）である。緑色の札は末席なので誰も欲しがらない。誰かが私に回すことを思いついたのだろう。もらった私はとてもうれしかった。初めて政治的にまともに扱ってもらったのである。特等席は真っ赤、次がたしかピンクだったか、よく覚えてはいない。ある人物は職場でのランクは私より低かったがもらったのは橙色、一つ等級が上の札だった。いずれにしろ私は『紅楼夢』の秋紋になぞらえて、他のものが赤だろうが黄色だろうが気にせず、「ただ太太（タイタイ）のお恵みをいただくだけ[4]」だ。

参列札に続いて一枚の通知が来た。それには大型バスに乗り込む場所、下車する地点、そして参列する時のいろいろな規則が記してあった。それを読んで私は大いに不安になった。橙色の札をもらったのは男性の同僚で、緑の札は私だけだった。私は道を知らない。バスを降りてから大勢がひしめく中で、どうやって指定された場所にたどり着いたらいいのか。それにセレモニーが終わったら、どうやって元のバスを見つけろというのだ。慌ただしく衣装箱を開けてセレモニー用の服を取り出しながら、私は家族と対策を練った。

「緑の札だってかなりいるはずでしょ、バスに乗ったら緑の札を付けた一番醜い男性を探して、その人から目を離さないでいるのはどうかしら」私は言った。

「なんで、一番醜い人なの？」

「その人に惚れ込んだと誤解されないため」私は答えた。

家族は、それはだめだよ、と笑った。「女性にじっと見つめられたら、醜い男ほど絶対自分に惚れ込んだと勘違いするだろうからね」

そこまでは考えなかった。確かに筋が通っている。それで私は、バスに乗ったら緑の札を付けた中で一番特徴のある人物を見つけ、目を離さずにいることにした。相手に悟られないよう気をつけてだが。

メーデーの朝早く、私は喜び勇んで大型バスに乗り込むと、すぐに緑の札を付けた女性を見つけ、想定外のことに喜びながら急いで彼女の横に座った。まるで異郷で知り合いに巡り合ったかのようだった。彼女も親切で、私が隣に座るのを嫌がることはなかった。こうして私は醜い、あるいは醜くない男性をそっと凝視する必要はなくなったのだった。

このバスには真っ赤な札を付けた三人の女性がいて、いずれも揃いの上下をまとっていた。すなわち、ウエストを絞った上着にぴっちりとした短いスカートである。どうやら常々真っ赤な札を付けて式に参列する人々のようである。バスを降りると彼女たちは勝手知ったる物言いで、まずトイレに行かないと、出遅れると大変、と話している。私たち緑札の二人組も女性だから、当然のごとく後に続いた。

トイレは広々とし、洗面所というべき造りである。良い香りが漂っており、壁に沿って純白な手洗いタブが並び、前面にはキラキラ輝く鏡がはまっていた。タオル掛けには真っ白なタオルも掛かっている。けれども個室トイレは

四つしかない。私はちょうど一つのドアの前に立っていたので、マナーとしてまずは他の人に譲ることにした。真っ赤な札を付けた女性が遠慮会釈なくさっと飛び込んだので、こちらはドアの横に取り残された感じだった。「もう我慢の限界で焦っていたのだろうか、こんなに慌てて」と私はひそかに思った。彼女たちは笑いながら大声で、今回は誰もトイレにご降臨しなかったみたいよぉ、何もかもピカピカで外国のお客さんを待ってるわ、と話している。私が個室のトイレに入ってからも笑い声や喋り声、乱れる足音が耳に入ってきた。それからシンと静まり返ってしまった。私は素早く用を足し、彼女たちを待たせては悪いと急いで服を直してドアから出てきた。と、洗面所には誰もいないではないか。

ぎょっとして、体中の血が凍りつく。一人天安門の洗面所に取り残されてしまったのだ。どうしたらいいんだろう！　大慌てで手を洗い外に出ると、緑札の相棒がドアのところで待っていてくれた。私は感激して安堵の息をつき、凍った血液も「階級的友愛」の温かさで溶けていった。憎っくきあの赤札は我慢の限界にきて慌てていたわけではなく、緑札の私が全く眼中になかっただけなのだ。もしかすると、私が越権行為を犯して大胆にも外国人を迎えるためのトイレに押し入ってきたとみなしたのかもしれない。こちらとしては相手に譲ってやったと思っていたのに！

緑札の相棒が、先を行く三人の赤札の後ろ姿を見て取り、私を連れて角を曲がったところで目の前に三足のハイヒールの踵が現れた。それを追いかけながら、あちこち曲がりくねった挙句小紅門から出ると、そこは天安門大通りだった。赤札の三人はどこかに消えていた。私は緑札の相棒の後について通りを渡り、広場の隅で自分たちの参列台を見つけた。

その参列台の高さや幅がどれくらいだったのかは思い出せないのだが、周囲が低い塀で囲まれていたことは覚え

ている。けれども後にその参列台を見かけることはついぞなかった。臨時で設置したものだったのだろうか。それにしても新しく造ったようには見えなかった。おそらく当時必死であたりを見渡していたので、自分が立っていた場所に注意がいかなかったのだろう。ただ太陽が刺すようにまぶしくて、照り付けられた顔の半分がどんどん熱くなっていたことは覚えている。台上に並んだ何列ものベンチはすでに人で埋まっている。私は低い塀に寄りかかってしばらく立ち、それから今度はベンチの端にちょっと腰かけた。けれども周囲の群衆や人々が手に捧げ持った様々な色の紙の花のほかには何も見えなかった。

「来た来た」という声が遠くからこちら側へと伝わってくるにつれて、群衆が歓声を上げ、手に捧げ持った紙の花が大きくうねる花の海原となり、波のように盛り上がったり下ったりしはじめた。天安門上の首脳が姿を現したに違いない。続いて、パレードの隊列の足音が聞こえてきた。突然空いっぱいに白いハトが放たれたかと思うと、数百数千の色とりどりの風船がぱあっと飛びだし、ゆらゆらと空に舞い上がっていった。中には長い標語をぶら下げているものもあった。パレードの隊列が一斉にスローガンを叫んだ。私は紅旗の一群が次々と通り過ぎるのを目にし、スローガンを叫ぶ声や足音を耳にして、パレードが前進しているのだとわかった。つま先立ちになり、首を伸ばせばパレードを垣間見ることができた。とはいうもののすぐ目の前に広がっていたのは、群衆の紙の花が浪のようにうねる花の大海原だけだった。

何も見えなかったが、大衆の中にあって自分というものは消えうせ、パレードの中に溶け込んでいた。「涙ぐみ」はしなかったが、涙というものも泣こうと思えば出てくるものに思われた。なにしろ「誇りに満ちあふれた感覚」や「取るに足りない存在という感覚」が同時に胸の中に起伏し、確かに「長らく興奮が冷めやらぬ」状態だったのだから。「一体化した」大衆というものがどういう感じなのか、多少なりとも体得することができたのである。

パレードの隊列が通り過ぎると、歓声を上げ万歳を叫んでいた人々も銭塘江の大潮の如く天安門に押し寄せていく。私ももちろん一緒に巻き込まれていったが、緑札の相棒をひっつかむことは忘れなかった。そして私も天安門の下に運ばれた頃には、すでに「波はむなしく空(から)の城を打ち、寂しく戻ってゆく」[5]状態と相成っていた。天安門の上にはもう誰もおらず、群衆も四散していた。私はさながら戻りそこねた一滴の河水のようだったが、我(われ)に返り、緑札の相棒がまだ散り去っていないのを見つけ、これ幸いと急いで彼女の後について私たちのバスを捜しに行ったのだった。

三人の赤札はすでに座席に収まっていた。私は緑札の相棒とバスに乗り、家に戻った。踵は痛み、首もガチガチに凝り、顔半分は日焼けでひりひりと火照っていたが、まだ興奮冷めやらぬ状態だった。ただ、何を見たのかと問われても答えに詰まり、「トイレはいい匂いで、手をふくタオルは真っ白だった」としか言えなかった。危うく一人天安門の洗面所に取り残されそうになった件は、自分が驚いただけで騒ぎにならずに済んだわけだが、おかげで得難い体験ができ、それで細かく述べることになった。大衆の中に身を置いた感想に至っては、実に浅はかなものでしかなく、繰り返し考える材料にはなりえても、どうもうまく言葉にはできないでいる。

一九八八年三月から四月にかけて

## 黒皮阿二(チンピラ)[6]

日本軍が中国を侵略し、上海はすでに陥落していた。蘇州振華女学校では特別に上海に分校を設け、租界の「孤島」で授業を始め[7]、学校の表札を掲げた。私は「犬が田を耕す[8]」よろしく校長を務めることになった。私たちの事

務主任が、およそ（学校を含め）表札を掲げるところでは、祝日ごとに、その地域のヤクザチンピラの頭に心づけを送らねばならない、と私に言った。当時私は三十歳前で、経験していないことには大いに好奇心をそそられた。ヤクザチンピラの類は、普段行き会うことになったが最後、目を合わすことすらできなかったので、彼らが実際どういう顔をしているのか見てみたくてたまらなかったのだ。

時はちょうど中秋節、心付けの受け取り手が一人また一人とやって来た。私は颯爽としているわけでも、オシャレなわけでもなく、せいぜい低学年担当の教員か事務室の職員といったところか、ともかく校長には絶対に見えなかったはずだ。「見に行ってもいいかしら」と事務主任に聞くと、主任が笑って「いいよ、行って見てくるといい」答えた。

私は主任の部下の職員を装って、応接室に躍り込んでいった。

まずやって来た人物は貧弱な体格で、黒い皺だらけのひょろ長い顔をしており、凶悪にも狡猾にも全く見えない。

「さっき何某に渡したところですが、どうしてまた来たのです?」と私は話しかけた。

「××ですかい? そいつあ『瘪三』でがす」相手が答えた。

「一昨日に来た××は?」

「そいつあ『告化甲頭』だ」と答えが返ってきた。

私はいぶかるように相手を見て尋ねた。「で、あなたは?」

向こうは親指を立て「あっしは『白相人』でっせ」と答えると、続けて上海でも有名な「プレイボーイ」の名前をずらりと挙げた。自分もその一人だということである。それから懐をまさぐり名刺を一枚取り出した。それは通常の四分の一ほどの幅をした上等な紙質で、右側の上端に黒々と四つの漢字で「黒皮阿二」と印刷されてあった。

私はこの斬新奇抜な名詞を見て、うれしくて小躍りするところだった。「あっしの管轄は帽子のかっぱらいとバッグの引っさらいでさぁ」等の説明を聞くと、「管轄」云々は、もっぱらこれをやるということにも、これらをやらせないよう請け負うともとれた。当時私は、子供がお菓子をもらったときのように他のことはすっかり忘れ、相手のご高説を賜る暇も惜しく、急ぎ中に引っ込んで主任に報告し、後のことは主任に任せたのだった。

私はこの希少な名刺をバッグの中に入れ、バッグがかっさらいにあったとしても、中に入っているこの名刺のおかげで誰かが返してくれるかもしれない、とひそかに思ったものだ。彼らは「兄貴は男っ気があるねえ」などと言うに違いないのだ。惜しいことに、何度も取り出して自慢しているうちに、どこかでなくしてしまった。そしてこの「黒皮阿二」氏にも巡り合うことはなかった。

一九八八年十二月

## 小さなほら(9)

日ごろ人がほらを吹き、大言壮語しているのを聞いて、自分がいかにちっぽけな存在なのかを思い知らされている。そこで私も「我こそは偉大なり」とうそぶいてみようとした。しかし吹き出たのは「ねずみっぺ」程度であった。生地が発酵せず全く膨らまなかったのだ。ここに三つを挙げておこう。ご笑納あれ。

## 第一話

子供の時、カトリック教会が経営する啓明女学校[10]に入学し、寄宿舎で過ごした時のこと。私たち幼年組はムーム（修道女）の服に興味津々だった。なにしろ帽子を三重にし、スカートを七枚身に着けているというのだ。帽子を三つにスカート七枚だなんてどうやって身に着けるのだろう、私は知りたくてたまらなかった。

啓明は「外教学堂[11]と呼ばれ、もっぱら信者ではない学生を入学させていた。カトリックでは毎年の春、佘山への巡礼を行った。啓明でも学生を佘山にやることにしていた。二人の姉[12]はいずれも参加するのだが、幼年組は行かないことになっていた。当時九歳だった私を一人学校に残していくのが心配だった大姐が私に「校長ムームー」に「お許し」をいただくようにと言った。つまり行きたいと言って許してもらえるか試してごらんなさい、ということである。校長ムームーはとても喜んで、即答で許可してくれた。こうして私はスカート姿の制服を着た上級生と一緒に巡礼することになった。

列を率いるのは年配のムームーで、彼女は私をよく「小康康（シャオカンカン）」と呼んでかわいがってくれた。一行は小舟で佘山まで行き、「十字架の道行き」の登り等をしてから下山して舟で一泊し、それから翌日学校に戻ることになっていた。その晩、船倉に二人一組の床を敷くと、私は錦ムームーが付き添って寝ることになった。皆が寝静まるのを待って錦ムームーはランプの下で着物を脱ぎ始めた。私は狸寝入りをして目を細めてこっそり見ていた。黒い帽子をとると下に真っ白な内帽があり、その下にさらに小さな黒い帽子があった。黒い上着と黒のスカートの下にはまた黒の内スカートがありその下は真っ白な下着の上と下着のスカート、その下は黒の服と黒いズボンだった。帽子は

本当に三つだったが、スカートは七枚ではなく、せいぜい三枚。その後、私は寝入ってしまった。

錦ムームーは翌日心配そうに言った。「小康康は疲れすぎちゃったのね。夜中に布団を蹴っ飛ばしてばかりいて、三回もかけなおしたのよ」。少々ばつが悪かった。眠いのを我慢して踏ん張っていたのは、彼女が帽子や服を脱ぐところを見たかったからなのに、彼女は私が疲れすぎたのだといたわってくれたのだ。

このあとは、でも、得意でたまらなかった。ムームーと一緒の布団にくるまれるなんて、この私だけだと。

## 第二話

東呉大学に入学したての頃[13]、女子学生が少なかったので、バレーボールチームのメンバーに私も加えてもらえた。我々のチームの最初の試合は隣の大学チームと行うことになり、コートは我が母校のほうを使うことになった。大勢の男子学生が応援に詰めかけた。試合を観戦するのはいずれも私の旧友たちだった。私にサーブが回ってきた。精いっぱい力を込め、げんこつでボールを打つと、思いがけずグーンと距離が伸びた。会場がどよめき、「いけいけー」と声が上がり、拍手が起こり、歓声が上がる。その声に勢いづくようにボールはますます威力を発揮して宙を飛び、パシッと地面をたたいて転がった。そして私は一点を稼いでいた（もちろん二点目がそううまくいくはずはなかったが）。

当時チームはちょうど競っていたが、そこに一点が入り、しかも大きな声援が沸き起こったために相手チームは気が萎え、なんとその試合は我々の勝利に終わったのだった。

今、テレビの画面でバレーボールの試合を見るたびに、ネットの向こう側に飛んでいったあのボールが思い出さ

れ、思わずそっと「私だって一点取ったんだから」と風呂敷を広げたくなる。

## 第三話

上海が日本軍占領下にあった時、校長を任されていた中学校[14]が授業停止となり、私はある小学校で代行教員をしていた。同僚の小学校教員はいずれも二十歳前後である。私は少し年上だったが、互いにとても仲が良く、授業を終えると皆で一緒にトロリーバスに乗って帰途についた。それは始発バスなので、乗客は私たち数人だけだった。運転手はいたずらっ気があり、わざと車体を揺すり、そのたびに悲鳴が上がったり笑いが起こったりと大騒ぎとなった。そんな時でも私は品位落とすべからずと姿勢を崩さず声を立てることもなかった。この路線の最初のいくつかの停留所は乗客がいないので、運転手も車掌や私の同僚たちと談笑していたが、私はいつもじっと黙ったままだった。ある時、車掌が笑いをこらえつつも、同情を込めて「あの人、おなかを壊しちゃってねえ」と一人の同僚について語りはじめ、その同僚が一日中釣銭を間違えてばかりいたこと、それでもバスから降りるに降りられなかったことを話した。その時ふと私は、彼らが単に「運転手」とか「車掌」とか呼ばれる存在ではなく、私たちと同じ人間なのだと感じたのだ。それからはごく自然に皆のおしゃべりに加わるようになった。彼らはよく、今日は何某の家でこういったことがあったからあとで代わり番してやらなくちゃ、とか、誰それは暗算が苦手でしょっちゅう釣銭を多く渡して弁償しているとか、帳簿を検査する西洋人が剣呑だ等々と語った。私は口数が少なかったので、皆からすこしお上品だと思われていたかもしれないが、でももういっぱしに彼らの仲間だった。

この路線バスが次第に繁華街に入ってゆき、大通りを越えて永安公司に差し掛かる辺りが一番にぎやかな場所

だった。ある時私は永安公司で買い物する必要があったので、前もって運転席のすぐ後ろに立っていた。ところがバス停で止まった時降りるのを忘れてしまい、バスが走り出してから「あらっ」と声を上げた。運転手は前を向いたまま、「どうしました？」と尋ねた。降り損ねてしまったの、と私は答えた。「大丈夫、デパートの入り口までお届けしますよ」と運転手は答えた。永安公司の正面の入り口は交差点近くにあり、停車禁止である。けれども運転士はゆっくりとバスを走らせ、入り口近くまで来たところで、ほとんど気がつかぬくらいの動きですっとバスを停めた。そしてドアをほんの少しだけ開けて私をすり抜けさせた後、また走り出した。私は、トロリーバスで永安公司の入り口まで送り届けられたのである。まったく大いに自慢できることではないか。

## 水辺の住まい[15]

蘇州で大学[16]に通っていたころ、大学のすぐ横が城壁だったので、私は授業がない時によく城壁に上がって蘇州の街を一巡りしながら、街の外と中の風景を楽しんだ。葑門楼の近くには清らかな水をたたえた川が流れ、岸に植わった数本のしだれ柳が川面をなでていた。水際は石段になり、そこから土の階段と土手を上がると小さな門と白亜の壁に突き当たる。城壁の高みからは、壁の内側の形よく整えられた竹の垣根と真新しい瓦葺の家が見えた。この場所に差しかかる度に私は足を止めて眺め、「なんて趣のある住まいなんだろう」と賞賛したものだ。それが、縁あってこの家に足を踏み入れることになり、さらには憧れていた場所が、実は三蔵法師が旅路で出くわす「小西天[17]」だったと知ることになるとは。

当時私は独学でフランス語を勉強していた。大姐は夏休みに発音の基礎を教えてくれたが、学期が始まると仕事

があるため私に自習をさせた。私は文法を学び、新しい単語を覚え、練習問題をやったが、誰かに指導してもらいたかった。当時、蘇雪林先生[18]が大学で授業を担当されていた。先生は大姐と仲がよかったので、私が教師を探していることを知り、一人のベルギー人の女性を紹介してくれた。大姐によると、このベルギー人の女性はベルギーに留学していた中国人に嫁いだのだという。中国人の留学生は帰国してからガラス工場の工場長となった。その長兄が将軍で、次兄が旅館の支配人となっており、三兄弟が一つの屋敷に住んでいた。ベルギー人の奥様は大家族の生活に慣れず別に住まいを設けたのだが、平素寂しくしており、大学生の女生徒との交流を望んでいるということだった。蘇雪林先生を通じて会う日が決まると、住所を頼りに訪ねて行くことになった。

一人で行くのに気後れして、私は同室の学友をそそのかして連れだした。学校の通用門から出ると、ほどなくして市内の通りを外れ田舎道に入った。迷ったのかと思ったが、村人に言われた通りに進むと、すぐに表門を見つけ出すことができた。といってもきちんとした門ではなく籬の小さな門だった。門を入ったところで二羽の大きなガチョウが首を伸ばして突進してきた。鳴き声をあげながら頭を振り立ててつつこうとする。ガチョウも番犬役を務めることができるわけか。私は中庭に足を踏み入れ、ふと気づくと、久しくあこがれていたあの水辺の家にいるではないか。

ガチョウの鳴き声を聞いて女主人が出迎えた。若い頃は美しかったのだろうが、顔色が悪く憔悴していた。当時若かった私の眼には、三、四十歳の中年女性に見えた。痩せぎすだがすらりとして背格好はよかった。色褪せた流行おくれの柄物の絹の洋装だったが、履いていたのは中国式の野暮ったい布靴である。私たちは中庭で互いに紹介し合った。

そこは竹も花もない中庭だった。籬の内側に何かわからぬ野菜の畝がめぐらされていた。籬の下に植えられてい

たのは瓜や豆の類だったのだろう。細い葉やツタは籬の半分の高さにもなっていなかった。私たちは母屋に入ったが、内側はむき出しの土間ででこぼこだった。古びた四角いテーブルと白木板の長椅子、粗末な背もたれのついた椅子や腰掛けが置いてあり、腰掛けはテーブル代わりにも使われている。私たちは手土産を差し出し、女主人が茶や菓子を並べた――安いお茶に素朴な菓子、当時はこれもまた別の趣があると感じたものだった。

この外国人の奥様は中国語を話すことができず、英語も通じなかった。私たちが持参した教科書は英仏対照のものだったので用をなさない。私たちはフランス語ができない。おそらく彼女は学生に教えたことがなかったのだろう。授業はかなり滑稽なものになった。彼女が対象を一つ一つ指さしながらフランス語の名詞、例えば「椅子」「カップ」「ティーポット」等を発音した。彼女が発音する「カップ」は実際は小ぶりの茶碗で、発音された「ティーポット」はフランス語の「ティーポット」と音が違った。私たちは「有難う」としか言えなかった。

彼女にはよちよち歩きの娘がいた。母親によく似ており、青白く目の色も淡い青をしていた。とてもおとなしくて部屋にいる気配がまるでない。覚えているのが、この洋夫人が客の目の前で娘を抱き上げ、泥の地面の上におしっこをさせたことだった。こんなに田舎染みた外国人の奥様は見たことがなかった。

しばらくすると洋夫人の夫が帰ってきた。とても人当たりが良く顔中に笑みを積み上げ――いや「積み上げる」ではなく、笑みをしわの中に深く刻み込んでいた。顔中しわだらけなのである。どれだけ必死に笑顔を作ったらこんな深いしわとなるのだろうか。このしわ先生は四、五十歳にはなっているだろうと思われた。ガラス工場を見学しにいらっしゃいとそれは熱心に誘うので、私たちも誘いを受けることにした。

私たちは毎週一、二回ほどこの洋夫人のところに通った。だいたいが午後だった。三回目か四回目の時、授業が半分ほど過ぎたあたりで、夫であるガラス工場の工場長が工場に案内しましょうと私たちを迎えに来た。洋夫人は、

しばらくしたら食事を届けるからと工場長についていく私たちを見送った。一行はかなりの距離を歩き、橋を渡ったところで乱雑に物が積み重なった小さな建物に足を踏み入れた。内部はみすぼらしい一間で、三方が壁に囲まれ、泥の地面の上部に屋根がついていた。これがガラス工場だった。一つの隅に割れたガラス瓶、割れたグラス、ガラスの破片等が積み重なっていた。工場長によると、原料がないのでガラスの破片を再利用するしかないということだった。両側の壁に沿ってそれぞれ溶解炉が設けられている。一つは使われておらず、一つの炉では火が燃えさかり、るつぼいっぱいにどろどろのガラスが入っていた。この炉は昼夜を問わず炊きっぱなしで、職人が交代で番をするということである。職人が三人だったか四人だったか覚えていない。彼らが、子供が石鹸の泡を吹くように大きな硝子の泡を吹くと、真っ赤な色をしたその泡がどんどん長く伸びていった。工場長の説明によると、この細長い円形の気泡は型が定まると両端が切断され、底がつながった二つのランプのほやになるということだった。そして、ほらっと、底がつながったほやがいくつも泥の地面の平らな場所に乾してあるのを指さした。すでに冷却されている。話によると、辺鄙な村でもランプを使っており、そしてほやを生産するのはこの工場だけなので商売繁盛なのだという。私たちは、真っ赤に焼けたガラスの気泡にどうやって型をつけるのか、ガラスの破片がどうやってドロドロに溶けるのか、薄いつながった一対のほやをどうやって切断するのか等を見てみたいと思った。秘法だったのか、運が悪かったのか、見る機会は巡ってこなかった。洋夫人がちょうどその時、腰をかがめ、両腕をいっぱいに広げて小さなテーブルほどある蒸籠を抱えて入ってきたからである。誰かが蒸籠を受け取り室内で一つだけあった四角いテーブルの上に置いた。蒸籠の中にはまるまるとした大きな饅頭(マントウ)が並んでいた。洋夫人はくるりと向きを変え、今度は春雨スープの入ったブリキの桶を持ちあげてテーブルの上に降ろした。それで私と友人は慌てて暇乞いをしたのだった。

学校に戻る道すがら、私たちは二人であれこれと推測した。夕食を、工場長は労働者と一緒に食べるのだろうか。それとも家に戻って夫人と一緒に食べるのだろうか。あの蒸籠いっぱいの大マントウは近くで出来合いを買ったものなのだろうか。それとも家で生地を膨らまして作ったものなのだろうか。マントウと春雨のスープは船で運んできたのか、それとも陸路だったのか。運んだのは春雨のスープだけだったのか等など。いずれにしろこの工場長夫人は辛く疲れる重労働をこなしているのだ。私たちはこれまで蘇州のマッチ工場やレンガ工場などいくつかの工場を見学したことがあったが、こんなにみすぼらしい工場は見たことがなかった。ガラス工場がこんな状態であるならば、工場長の兄がどういった将軍であり、二番目の兄がどういった旅館の支配人なのかは推して知るべしだった。

友人はフランス語を学びにこの洋夫人のところには二度と行こうとはしなかった。「次は一人で行ってちょうだい。私は失礼するわ」と彼女は言った。

これ以降、私は一人で辞典を抱えてレッスンを受けに行くことになった。私が文法がおかしい文をいくつかひねり出すと洋夫人が私に向かって一字一字発音する。それがわからない時は辞書を引いた。その単語がふさわしくない時は別の言葉を探した。繰り返し話しながら同時に辞書を引き、身振り手振りも併せて言葉では言い表せない表現を補うと、なんとか会話が通じるようになった。例えば「あなたのこの住まいはとても美しい」と言うと、洋夫人が胸にたまった思いを告げるのである。「私は大家族が好きではない」「大家族はよくない、贅沢で、怠惰で、仕事をせず、朝から晩までマージャンをしている」と彼女は言った。夫には離婚した夫人がいて彼女もいっしょに大家族の中に住んでいる、とも語った。自分は子供を産んだが、食べるものはいつも春雨のスープばかりである（家の壁に掛けてあったのが二束の乾した春雨だった。指でさしたのですぐ理解できた）。彼女を虐めているのが兄嫁なのか、それともその元の夫人なのかはわからなかったが、しつこく聞き出すのは憚られた。この話が一回きりだ

ったのか、繰り返し話題になったか、今はもう思い出せない。

私は、彼女の左手の薬指にはめた結婚指輪が粗悪な造りで、金の色が本物らしくないことに気がついていた。後に、指輪の上部にくっきりと「大聯珠」の文字があるのが見えた。「大聯珠」はタバコの銘柄である。この指輪はタバコのラベルの抽選で当たった一等か二等の景品だったのだろう。指のサイズに合わせて作ったものではなく、長く伸ばしたその両端の狭く薄い部分を指に合わせて巻き付けたものだ。洋夫人は遊び心ではめているのだろうか。いや、そうではない。とても大切にして指からは外すことはない。彼女は、宝石を嵌(は)めた合金の小さなイヤリングをつけ、右手にも宝石を嵌めた合金の指輪をしている。高価なものではないが、精巧な造りである。金の装飾品の価値を知らないわけではないのだ。あのしわ先生はいったいどのように「大聯珠」という文字の説明をしたのだろうか。

ある時、見せたいものがあると彼女が言った。そして寝室に取りに行ったので、私は後に続いて寝室の入り口で待っていた。寝室は母屋の東側に位置し、仕切りの壁の北の端にドアが設けられ、壁に北向きの小窓があけてあって、陽光が差し込んでいた。見上げるとドアの横の壁にガラスを嵌め込んだ大きな額縁入りの写真が掛かっているのが目に入った。写真の背景は洋館の側面で、真ん中は芝生が広がり、前列の椅子には年配の西洋人が数名座っている。皆颯爽としている。後列にはたくさんの若くてきれいな男女が並んでいた。頬のふっくらとしたみずみずしい目をした美しい娘がおり、洋夫人の面影がある。部屋から出てきた時に尋ねると、頷いて、これが父親、これが母親、それからこれと指したのはやはり彼女自身だった。その他の人々は兄弟姉妹や兄嫁などだった。この家族集合写真は彼女が家を離れる前に撮ったものだった。

彼女の父親はガラス工場の工場長で、彼女の夫はベルギーに留学した時、この父親の下で実習をしていたのだと

いう。

写真の中の彼女は愛らしい乙女だった。当時はしわ先生の顔はまだしわだらけではなかったのではないか。――少なくともあれほどのしわはなかったはずだ。もともとはそれなりにハンサムだったはずである。工場長のお嬢さんがこの留学生を見初めたのだろうか。それとも留学生が外国の乙女に夢中になってしまったのだろうか。いずれにしろ、二人は間違いなく恋のとりこになったのだろう。蜜にとらわれた蠅のように甘くべったりと。そして恋人から夫婦へと相成ったのか。新婦側の両親はこの婚姻に同意したのだろうか。家族写真にはしわ先生の姿はない。奥様が嫁入り道具を何も携えてこなかったのは明らかである。この留学生はどんな儀式で娘と結婚したのだろうか。洋夫人は敬虔なキリスト教徒であり、礼節を気にする女性でもあったから、式をあげずに駆け落ちし、「罪深い生活を送る」ことには絶対に同意しなかったはずだ。しかも同じ信仰を持つ者でなければ結婚はしないはずである。しわ先生はカトリック教徒かまたは結婚のために信者になったのだろうか。カトリックは離婚を許さないが、おそらく離婚している者が信徒になることは許したのだろう。

洋夫人が私に見せたのは古い新聞の小さな切り抜きだった。指の関節二つほどのほんの小さな長方形の紙面に、胡麻のような細かい字で、某某（しわ先生の氏名）はすでに某某と離婚したという声明が記されてあった。どの新聞かわからない。年月日の記載もなかったが、新聞の端っこの、誰も注意しない「人探し」か「遺失物探し」の欄の記載であるのは明らかだった。

彼女が知りたかったのは、この小さな紙片は合法的な証拠となるか否かだった。洋夫人がどのように質問し私がどのように答えたのか私は覚えていない。ともかく、新聞の紙片を一目見て彼女の訊かんとすることがわかったように、彼女は、思わず見せてしまった私の表情を見て取ったはずだった。もちろん私の答えを待つまでもなかった。

彼女はよくよく私の反応を観察していたに違いない。私はフランス語が話せないことを喜ぶ必要はなかった。

例の結婚指輪にあの家族写真、そして新聞の小さな長方形の切れ端上の離婚の掲示を見てしまってから、私は自分も何かの詐欺に加担しているような気分になり、どうもにも落ち着かなくなった。そして洋夫人を訪ねることが重荷になり、それで心ばかりのお礼の品を贈り、授業が忙しくなったと嘘を言って行くのをやめてしまった。

それからほどなくして大姐が、例のベルギー人の女性が帰国したと教えてくれた。うわさでは、しわ先生は洋夫人の前で二人が信奉する神に誓い、もし自分がだましたのならば、罰として我らが娘に死を賜りたまえ、と述べたところが、なんと娘が本当に死んでしまったのだという。奥様にとって、この輩が神を冒涜し、しかも愛娘を犠牲にすることも厭わないとは想定を超えていた。彼女はすぐさま教会に通知して中国駐在ベルギー領事館に連絡を頼み、故国に送り返してもらったのだという。

彼女の両親は、花のようだった娘が干からびた葉っぱに変わり果て、たった一人で戻ってきたのを見てどれほど心を痛めたことだろう、と私は思った。そして、しわ先生は、周囲にしょっちゅうお愛想笑いをしていたために顔中しわだらけになったに違いないとも考えた。おそらく最初の妻を養ってくれている兄、兄嫁たち、自分の元の妻にしょっちゅうお愛想笑いをしなければならず、外国人の奥様に対してはもっと笑いかけなければならず――それこそ必死でお愛想に次ぐお愛想笑いをしただろうが、やはりだめだった。とうとう外国人の奥様を安心させるために意を決してあの誓いを立てたのだ。それがこともあろうに青白い聞き分けのいいわが娘が誓いに応えて逝ってしまったのだ。しわ先生はもう一度お愛想笑いをして、元の妻とよりを戻したに違いない――いずれにしろ彼ら二人はそもそも離婚などしていないのだから。あの水辺の家は――今でもまだなにか痕跡を残しているのだろうか。

目を閉じると、川岸に並んで立つしだれ柳の老木の、垂れてそよぐ柳の枝から垣間見えるあの水辺の家が目の前

に浮かぶ――それはそれはうっとりするような魅惑的な景色だった。

一九九四年四月一日　病にあって。

## 注

（1）文化大革命の最中、河南の貧しい農村地区に設けられた知識人労働改造所「幹部学校」でのおよそ二年にわたる体験を回想録として記した散文集。一九八〇年に執筆され、一九八一年四月、まず香港の月刊誌『広角鏡』に掲載された後、一九八一年五月に広角出版社から単横本として出版された。そして同年七月に北京の生活・読書・新知三聯書店から単行本として出版される。文革について発言がまだためらわれていた時期での刊行が驚きをもって迎えられるとともに、時にユーモアを感じさせる抑えた筆調での洞察の深さが高く評価され、楊絳の名を国内外に広く知らしめることになった。

（2）邦訳された楊絳の作品は以下のとおりである。

中島みどり訳

散文集に『幹校六記』みすず書房、一九八二。

『お茶をどうぞ』平凡社、一九九八。

小説に『風呂』みすず書房、一九九二。

以下は雑誌掲載の邦訳。

「どこがいいのか」――オースティン『高慢と偏見』を読む」『みすず』三八三号、みすず書房一九九三、二。

「傅訳伝記五種代序」『みすず』三九〇号、みすず書房、一九九三。

「失敗の経験（翻訳覚書）」『飈風』三十一号、飈風の会、一九九六、一。

「呉宓先生と銭鍾書」『飈風』第三十四号、飈風の会、一九九八、十二。

「章太炎先生、掌故を語るのこと　他一篇」『飈風』第三十五号、飈風の会、二〇〇一、八。（※この「他一篇」が、

邦訳の原題「水辺の家」である。アクセスの便を考慮し、今回「水辺の住まい」として新たに櫻庭が訳出したが、旧訳に多くを負っている。）

「再読『ドン・キホーテ』」『飈風』第四十八号、飈風の会、二〇一〇、十。

「ドン・キホーテと『ドン・キホーテ』」『飈風』第四十七号、飈風の会、二〇一〇、四。

「サッカレーの『虚栄の市』を論ず」『飈風』第四十九号、飈風の会、二〇一一、五。

「フィールディングの小説理論」『飈風』第五十号、飈風の会、二〇一二、一。

櫻庭ゆみ子訳

「叔母の思い出」『浪漫都市物語―発見と冒険の中国文学5』ＪＩＣＣ出版局、一九九一。

「林ばあさん」『中国ユーモア傑作選　笑いの共和国』白水社、一九九二。

『別れの儀式　楊絳と銭鍾書　ある中国知識人一家の物語』勉誠出版社、二〇一一。

「ＲＯＭＡＮＥＳＱＵＥ」『浪漫都市物語―発見と冒険の中国文学5』ＪＩＣＣ出版局、一九九一。

（3）原題「第一次観礼」一九八八年四月作。『雑憶與雑寫』（香港・三聯書店、一九九四年）所収。文革前、微妙な立場に追いやられ始めた知識人の状況を描く一編。自らも戯画化しながら皮肉を利かせて当時の政治運動の滑稽さを描いた作品の一つ。注（6）にあげる『楊絳作品集』には未収録。出版社側の配慮か否かは不明。

（4）『紅楼夢』第三十七回。賈宝玉に仕える召使いの一人、秋紋が、宝玉の命で賈老太太と王人に届けたことで（二人の奥様から）余り物の衣装を褒美にもらうことになり大喜びするくだりを指す。

（5）唐の詩人劉禹錫（七七二―八四二）の詩「金陵五題・石頭城」の句。「山囲故国周遭在、潮打空白寂寞回。滙水東辺旧時月、夜深還過女墻来。」

（6）原題「黒革阿二」一九八八年十二月作。『楊絳作品集』第二巻（北京・社会科学出版社、一九九二年）所収。普段は交わることのない上海のチンピラとの会話をユーモラスに描き、見事に世相を切り取った一編。

（7）振華女校は一九一七年、王季玉が蘇州に創設。一九二三年組織された理事会（董事会）には蔡元培、竺可楨も名を連ねている。楊絳は上海のカトリック女学校啓明女学から転入し、卒業後は東呉大学に入学している。文中にあるよ

うに、日本軍の侵略によって蘇州が陥落すると、太平洋戦争勃発まで上海に分校が開かれた。「孤島」とは、日中戦争勃発から太平洋戦争勃発までの期間かりそめの独立を保っていた上海の旧英仏租界地区を指す。周りを日本軍が占領していたため、「陸の孤島」と呼ばれた。英仏留学から上海に戻っていた楊絳は、この間王校長に請われて二年ほど上海分校の校長を務めた。一九七〇年代末に楊絳が執筆した短編小説「事業」は振華女校での体験をもとに創作されている。

(8) 原文は「狗耕田」、「見当違い、おかど違い」の意味。

(9) 原題「小吹牛」一九九一年三月作。注(6)前掲書所収。お転婆の少女時代から、戯曲作家として名が売れ、日本軍占領下の緊迫した、それでも日々の小さな喜びを失わないたくましい市民の一面をスケッチしたもの。

(10) 啓明女校は一九〇四年、フランスカトリック拯亡会が徐家滙天鈿橋路に設立した寄宿学校。六歳から二〇歳までの女子に初等、中等教育をほどこした。規律の厳しさと豊かな情操教育、外国語(英語、フランス語)を含めた質の高い教育で中上流階層の家庭に人気があった。楊絳は一九二〇年から三年間ほどこの学校で学んでいる。二〇〇二年に発表した回想録「我在啓明上学」(啓明で学ぶ)では薫陶を受けた寄宿生活を懐かしさを込めて詳細に語っている。

(11) 外国の宗教、即ちキリスト教の学校のこと。

(12) 楊絳は四女。一番上の姉、楊寿康はすでに啓明で教えていた。二女はチフスで亡くなっていたため、二人の姉とは、楊寿康と三女の楊閏康を指す。

(13) 蘇州大学の前身。一九〇一年、米国監理会によって「東呉大学堂」として開校、一九二八年、楊絳が入学した年に初めて女子学生を受け入れた。楊絳は、当初清華大学を希望していたが受験時に清華大学では南方枠で女子学生を募集しなかったため、金陵女子大と東呉大学を受験して合格、東呉大学で政治学を学ぶことにしたということである。「楊絳生平与創作大事記」『楊絳文集』第八巻(人民文学出版社、二〇〇四年)参照。その後四年次に大学紛争が起こり授業が停止したため、学友たちと北京に行き、清華大学の聴講生となる。その時のちに夫となる銭鍾書と出会う。東呉大学はその後一九五二年に蘇南文化教育学院、江南大学数理学部と合併して「蘇南師範学院」となり、同年、「江蘇師範学院」と改称。一九八二年「蘇州大学」となる。尚、一九五一年に、台湾に移った教員たちが一九五一年

「東呉補習学校」を開設、一九五四年「私立東呉大学法学院」として台北に復校、一九六八年に東呉大学と改称されて今に至る。

(14) 振華女学校のこと。注（7）参照。

(15) 原題「臨水人家」一九九四年四月作。『雑憶與雑寫一九九二―二〇一三』（生活・読書・新知三聯書店、二〇一五年）所収。注（2）※参照。
ベルギーのガラス工場に留学にやってきた中国の留学生と恋に落ちて異国の地にやってきたベルギー人の女性を限りない同情と共感をこめて描いた作品。懐かしさと哀しみのこもった一篇。

(16) 当時蘇州にあった東呉大学のこと。注（12）参照。

(17) 偽の極楽という意味。『西遊記』で三蔵法師たちの一行が立ち寄った「小西天」とも言われる小雷温寺が実は極楽ではなく、黄眉大王なる化け物が仕掛けた罠だったという話に拠る。

(18) 作家、文学研究者（一八九七―一九九九）。本名は蘇小梅。蘇雪林は字。緑漪はペンネーム。浙江省出身。一九四九年に台湾に移住する。散文集『緑天』（一九二八）、小説『棘心』（一九二九）等。